

冬の海辺

豚ならば豚らしく
鳥ならば鳥らしく
人ならば人らしく
役人ならば役人らしく
芸術家ならば芸術家らしく
僕ならば僕らしく
君ならば君らしく・・・

そんなこんなで波打際に
僕は何時までしゃがんでいるのやら

それほどに

波の舌先に光るダイヤの粒は美しく、^{かる}軽く
重ね重なる潮騒は懐かしく
水平線はやっぱり水平なだけで
だから僕は立ち去りもせず

それほどに

遮るもののない風は僕を震わせ
足の指をなめる塩水はつめたく
水平線の向こうには辿り着く岸辺も見えなくて
だから僕は服を脱ぎ捨ててもせず

ふと見れば

波の中から来たらしい
横這いする遠国の使者

僕はそれに砂を投げながら
啄木の歌を思い出しながら
ぼそりぼそりと呟く・・・

豚よりも豚らしく
人よりも人らしく
僕よりも僕らしく
君よりも君らしく